地球ミュージアム紀行

死海資料館／ヨルダン

死海を望むミュージアム

日髙 真吾
（ひだか しんご）
本館文化資源研究センター

死海資料館は、日本の支援により、二〇〇六年一二月に開館した博物館で、「死海パノラマ・コンプレックス」の一角にある。考古・歴史博物館が一般的なヨルダンではめずらしく、自然史系（地質学）の博物館である。

展示場の様子を紹介しよう。最初は地理学のコーナーである。ここでは、ヨルダン各地から採取された多種多様な岩石標本を展示している。これらの標本はその表情もさまざまで美しく、鉱物の知識があまりなくても、十分に鑑賞できる。また、実際に触ったり、座ったりすることができる岩石標本も展示してあり、その質感や感触が楽しめるようになっている。コーナーの最後には、鉱物標本がひっそりと机の上においてあり、傍らには虫眼鏡。標本にマークされた部分を虫眼鏡でのぞくと、鉱石中にキラキラしているものが見える。この鉱物が金鉱石だったのである。

次は、植物と動物のコーナーである。ヨルダンの動植物の紹介と死海の特徴を展示している。展示場の真ん中に死海が生まれた地殻変動を解説する模型が展示され、死海誕生の秘密を知ることができる。死海の基礎知識をえた後、次に展開するのが、人間の営みと死海のコーナーだ。ここでは死海が人の暮らしにどのように役立っているのかについて、死海の成分を利用して作られた石鹸や泥パックの製造法などを紹介している。死海グッズは、エステ用品や入浴剤、調味料としての塩などヨルダンのお土産としても有名であるが、これらの商品を購入する前に、ここの博物館を訪れ、死海グッズの予備知識をぜひ入手してほしい。

最後は、危機に瀕した死海のコーナー。今、死海は一年に約一メートルずつ縮小しており、このままでは将来、干上がってしまうといわれている。その原因は、死海に流れ込むヨルダン川の水が飲食用、農業用、工業用水として大量に使われ、その水量を減らしていることにあるらしい。ここでは、死海保護の重要性を訴えるコーナーとなっている。

博物館を観覧し、展望台に出ると、眼前には美しい死海が一望でき、振り返るとモーセ終焉の地であるネボ山あたりを見ることができる。モーセはネボ山の頂きから死海の対岸にあるエルサレムへ赴く一行を見送ったと旧約聖書にはある。そんな歴史ロマンもこの博物館では感じることができるのだ。

死海資料館のある「死海パノラマ・コンプレックス」。ミュージアムショップやレストランも併設されている

金鉱石の標本。金の見える部分をマークしてあり、虫眼鏡で容易に観察できる

展望台より死海を望む。この場所から見る夕方の眺めは特に素晴らしい

学芸員の方による展示解説。今後は、来館した子どもたちへも積極的に展示解説をおこないたいとのこと